

•Introduction

米の国、日本-----。

お米づくりはアジアで始まり、日本へは今から約2000～3000年前に伝わったと言われている。日本の高温多湿な気候にお米づくりは適し、安定して収穫でき、長く保存できることから、日本全国へ広まった。

そして今から遡ること百数十年、日本人の主食であるお米の流通で繁栄を極めた街が、日本の東北部に位置する県である秋田に存在した。その街の名は”角間川”。

多くの農家が、生きるために米を作り、立地を生かした舟運でそれらの米を大阪方面に流通させ、帰りの舟で上方の商品や石材を運んできて巨万の富を得た。

そんな街の当時の繁栄ぶりを、「農家の一年の生活」という切り口から見てみよう。

•春(3～5月)- -

まず冬の終わりから春先にかけて、土づくりが行われます。

品質の良い作物が育つためには、その土台となる土地が栄養分を豊富に含んで柔らかい土になっている必要があります。こうした土を作るためには、農家で土に手を加えていく必要があります。

耕す事で土を柔らかくし、肥料を撒く事で栄養分を供給していきます。農作業の全ての土台となるものなので、とても大切な行程です。

•□夏(6～8月)- -

土作りが終わったら種まき、苗植えを行っていきます。苗植えが終わったらここからが大切になります。作物がしっかりと育つためには、苗を植えたり種を撒いたりしてそのまま放っておくわけにはいきません。健康的に育つようしっかりとした管理を行うことではじめて、良い作物が育つのです。特に初夏や夏場は害虫の動きも活発で、苗や種が被害を受けやすい時期です。定期的に薬剤で駆除を行うなどの対策を行い、作物を健康的に保つように管理していきます。また、雑草なども茂ってくると作物の成長を妨げてしまうことがあるため、なるべくこまめに除去する必要があります。

•□秋(9～11月)- -

秋になると収穫のタイミングとなります。収穫は農業の中でも一大イベントともなり、その年の作物の出来具合を判断するタイミングでもあります。この時期に忙しさもピークを迎え、お米であれば乾燥や脱穀など必要な処理が行われて出荷作業も行われていきます。家族で農業をしている農家ではこうした作業を分担して行う事も多くあります。

・□冬(12～2月) - -

収穫が終る頃には、冬が訪れます。降り積もる雪は、多い時で150cmを超え3月の末まで田んぼを覆います。この雪は、強くて寒い北風からオブラートのように、田んぼを包みこんで土を休ませ、美味しいお米を作る源となります。

・Story1:米と角間川 - 恵まれた立地 -

当時の角間川地域も、やはり米づくりが盛んに行われていました。ただ、米をたくさん作るだけでは他の地域より抜きん出て繁栄することは叶いません。他の地域より抜きん出て繁栄した最大の理由は、その立地にありました。角間川という地域は雄物川と横手川という2つの川が合流する地点に存在していたため、水運の便に非常に恵まれていたのです。そのためこの角間川の港から多くの米が、当時の日本の商売の中心地であった大阪に船で運ばれていました。当時の県の財源はその県の米を換金する方法でしたが、角間川の港から移出された米量は県全体の米量の約50%を占めており、角間川港の繁昌ぶりが容易に想像できます。19世紀後半頃には、角間川は秋田県内屈指の裕福な町、商人地主の町となりました。

・□Story2:商人と角間川 - 豪商・本郷家 -

当時の角間川地域の繁栄を象徴するのが、かつての豪商・本郷家の建物です。

本郷家は当初は小さな商家でしたが、江戸時代後期から舟運の事業に乗り出して財を成しました。そして、その財を元手に田地を獲得していき、この地域有数の資産家に成長しました。1881年、明治天皇の東北北海道ご巡幸の折、国道筋から少し外れているにもかかわらず、この角間川地域をご宿泊地に選ばれました。当時、いかに角間川が実力のある町であったかを示す証と言えるでしょう。その時、本郷家が「行在所(あんざいしよ・天皇がお出ましの際の御殿)」を務めさせて頂きました。その建物はすぐに取り壊されてしまいましたが、「御座所(ござしよ・天皇の居室)」を示す四角い石を置いています。

当家の様々な建物は、今でこそ老朽化していますが、けやきや黒柿など、高価な木材をふんだんに使い、随所に優れ意匠が施されているので、文化財的価値が高いと評価されています。これは、その昔、角間川が雄物川舟運の中継地として繁栄し、財を成した家が幾つもあった、本郷家もその一つでしたから、このような豪華な建物を建てる事が出来ました。この家は、角間川の繁栄の「遺産」と言えます。

その後、1905年の奥羽本線開通により、舟運が廃れて町も徐々に衰退に向かいましたが、本郷家は既に広大な田地(小作地)を保有していたため、地主(農業の経営者)として戦前までは十分な財力を維持してきました。ところが戦後の農地改革により、「小作地(小作人に農業をするための土地を貸して賃料などを得る方法)」という主たる収入源を失ってしまいました。元来、このように大きな建物、そして庭園などの周りの敷地は、豊かな財力のあることを前提として存続できるものですが、戦後その前提が無くなったため、

長年維持管理をしていくのに大変な苦勞を重ねることを余儀なくされました。冬は豪雪地帯でもあるため、尚更です。

この建物が解体される可能性もありましたが、貴重な文化財であるとして保存を望む声を多数寄せられていることもあり、そのまま現在に至っています。幸い今では、母屋の東側三部屋を中心とする一面が、茶道に最適な間取りや造作をしているため、普段から茶道教室が開かれています。

・□Story3: 花火と角間川 - 前年の豊作を祝い、今年の豊作を願う -

日本の夏の風物詩、花火。そのルーツは古く、紀元前3世紀の古代中国、火薬の基本となる硝石が発見されてからと言われていますが、日本での歴史上の記録に残る花火の第1号は、それから約2000年後の1589年、伊達正宗が観賞したのが最初であるとも云われ、さらに1613年、徳川家康に英国人ジョン・セリーヌが、同行の中国人の手で花火を見せたという記録もあります。

そして角間川が属する大曲というエリアで毎年8月最終土曜日となった「全国花火競技大会 大曲の花火」は70万人の観客を集める日本でトップレベルの大会です。

「大曲の花火」の歴史は古く、江戸時代の頃まで遡るとされていますが、19世紀後半まで大曲の花火に関する資料はほぼ残っていません。

文献上で大曲の花火らしきものが初めて登場するのが、1800年初めに菅江真澄(すがえますみ)という紀行家が書いた日記「月の出羽路(つきのいでわじ)」に描かれている挿絵です。その後、角間川の舟運が栄えるようになると、船の発着場周辺には豪商が軒を連ね、歓楽街・繁華街が形成。商人の接待、また行事や祭などで、連日のように花火が打ち上げられるようになりました。そして1910年、地域の神社の祭典とのかかわりが深い奉納花火や余興花火が、「第1回奥羽六県煙火共進会」として開催されました。これが「全国花火競技大会 大曲の花火」の始まりです。

その後、戦争などで一時中断がありましたが、終戦の翌年である1946年に、現在の「全国花火競技大会」として再開されました。終戦の翌年に花火大会を企画するほど、この地域の人たちがいかに花火好きなのかがわかります。

・□Contents1- 模擬花火作り

概要:あなただけの花火を作る

国内でも数少ない、自分自身で花火を作ることができるコンテンツです。

熟練の腕を持つ花火職人が直々に、花火の作り方はもちろん、花火の歴史やその種類などを詳しく説明して下さいます。

体験で作ることができるのは火薬を入れない「フェイク花火」ですが、花火作りの前(場合によっては後)に実際に本物の花火を作っている工場を見学することもできます。こちらも花火職人の方が、花火ができるまでの工程に沿って工場内を案内して下さい。見学

が終わる頃には、きっと花火に対する考え方が変わり、より花火が身近にそして魅力的に感じることでしょ。う。

•□Contents2- 茶道体験

概要: 地域を代表する旧家での茶道体験

大きな古民家の奥の方、「床の間・付書院」があつてお茶のできる広間において、「まあ一服召し上がれ」という感じでお抹茶を飲んでいただくことだができます。おいしく飲むためにお菓子が先に出されます。「こういう部屋の雰囲気の中で、お茶がおいしいと感じて頂ければ、それでよいのです。」ということなのです。体験を終えるころには、きっと茶道を学んでみたいという意欲が出てくることでしょ。う。

•□Contents3- 花火巻き寿司作り

概要: 花火の彩りをお寿司で再現

100年以上の歴史を誇る「大曲の花火」。そんな花火の彩りをお寿司で再現しようということで考え出されたのが、この花火巻き寿司です。秋田のお米をふんだんに使って作る彩り鮮やかなお寿司は、きっと帰国してあなたの国でもみなさんが気に入ってくれること間違いなし！

•□Experience1- 模擬花火作り(2015.11.04 Feliciazoe)

•□Experience2- 茶道体験(2015.11.04 Feliciazoe)

•□Experience3- 花火巻き寿司作り(2015.12.23 Jasmine)